



たゆたうだけの日々に変化が生じていた。

それは加夏子にとって心地良い変化ではなく、どちらかと言えば苦痛を伴うものだった。

「オハヨウ！ いつまでもベットの中でグズグズしてちゃ駄目よ。食事をとったら遅れているリハビリのメニューを沢山こなさなきゃならないんだから。人參残したら銀さんに言ってトレーニングを倍にしてもらいますからね、ちゃんと食べるのよ！」

衣笠恵美子と名乗ったその看護師は、初対面で加夏子を嫌いだと言っただけで済んだ。

反発や嫌悪感を抱くより先に、余りにアッサリキッパリした態度に彼女は毒気を抜かれてしまった。むしろ逆に年下の加夏子のほうが、

「（この人、こんな調子じゃすぐにクビになっちゃうんじゃないかしら…）」

と心配してしまう位であった。

変わった人だなあ…

そんな印象を持ちつつズルズルと彼女のペースに乗せられて数日が過ぎてしまった。

否応無くペースアップしてゆくリハビリメニューに嫌気が差して何度か反抗を試みてはみたが、まるで石仏にあられをぶつけるように跳ね返されてしまう。

そしてシブシブ、普段に倍したメニューをこなす事になってしまうのだ。

何でこんな目に会わなきゃならないの？

今日は大好きな詩を読みたいのにつ！

不意に強い怒りが湧いてきて、加夏子は朝食をトレイごと恵美子の顔めがけて投げつけた。

ガシャアーーーン！！！！

病室中に食器と内容物が飛び散る。

食器をぶつけられた恵美子は、顔を押しえて前屈みになったまま動かなかった。

やがてゆっくりと躰を起こした恵美子を見た時、加夏子は自分のしてしまった事に漸く気がついた。恵美子の額はパツパツと切れ、白い肌に太い鮮血の条が幾つも流れていたからだ。

自分の顔から血が音を立てて引いていくのがわかった。

「今までで一番のヒットね、それだけ元気なら病人扱いしなくていいかな」

血まみれのまま、恵美子がニッコリと微笑んだ。

…血の涙を流す聖母マリア…

愕然としながら、フトそんな言葉が頭をよぎった。

◇

病室での出来事いらい、恵美子との間の葛藤は小康状態となっていた。

額の傷は出血の割に大したことはなく、恵美子自身、何もなかったかのように振る舞っているのだが、当の加夏子はすっかりしょげかえってしまっていた。

恵美子の額に貼ってある大振りの絆創膏を目にするたびに心の何処かがチクリと痛み、バツの悪さから言われる事に素直に従ってしまう。

誰かを憎んだり傷付けたりという感情とは無縁のまま育ってきた加夏子にとって、今度の出来事はショックであったのだ。

ワタシ、かわっちゃったんだ

歩けないからじゃない

喋れないからじゃない

もう戻れない

彼女の中で想いの蔦が絡みつき、捻れ、またひとつ心の牢獄を造り出す。

病院生活が始まって以来、彼女が編み続けてきた蔦の牢獄の数がどれ程のものか、恵美子はもとより周囲の誰一人として知る術は無かった。

もし加夏子の闇を理解する者がいるとしたら、それは…

いつにも増して憂いの色を濃く宿した顔をふと上げ、加夏子が恵美子をじっと見た。

「ん？ なに」

視線に気がついた恵美子がクリップボードにペンを添えて差し出すと、細い指がさらと短い文字をしるす。

最近筆談すら億劫になりがちな加夏子にしては珍しく急いた様子に興味をそそられ、恵美子はボードに目をおとした。

ジュンはどこにいるの

それだけ。

ボードの向こうに、訴えかけるようなまなざしをひたと据えた加夏子が静かに座っていた。

この娘はここから出たいのだ

病室ではなく、『ここ』から連れ出してくれる者を待っているのだと、理屈ではなく直感が恵美子に教えた。

ただ仲良しに会いたくなっただけじゃない、あの王子さまは、彼女の閉じ込められている部屋の鍵を確かに持っているのだ。

看護師としてのプロ意識が恵美子にしらを切らせた。

「ジュンって… ああ、堀川殉くんね。彼なら居ないわよ。一時退院で帰宅中ね」

事務的に返答すると、加夏子は酷く落胆したように車椅子を窓の外へと向けた。

外は晴れてはいなかった。